

平和の種子を育てよう

— 莊司雅子先生の生涯を思う —

津 守 真

二〇〇三年六月、私は下関梅光学院開学百三十二周年記念式典に参列し、帰途、広島流川教会ながれがわの聖日礼拝に出席した後、莊司雅子先生のお墓に立ち寄った。急な坂を上った小高い丘の頂上に、広島のカリスト教会合同墓地があり、その流川教会の墓地に、フレールベルと同じ、立方体、円筒、球を組み合わせた墓石が立っていた。フレール

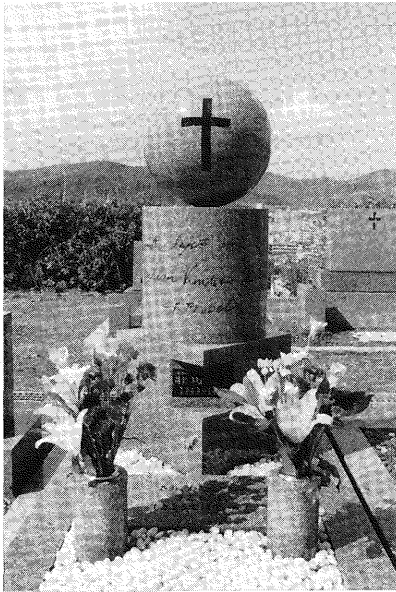
ベルの愛誦句『さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか』が和独両文で刻まれていた。私が今回広島を訪ねたのは、先生のご葬儀がなされた流川教会の森澤一由牧師の告別の辞が先生の生涯の真実に触れたものであることを、葬儀に出席した友人たちから聞いていたからである。

フレーベル教育学

私と莊司先生との直接のつながりは、先生の晩年、OME Pを通してであるが、遙か以前からフレーベル研究の大先輩として仰ぎ見ていた。私が学生の頃読んだ教少ない幼児教育の書物の中に、莊司雅子著『フレーベルの教育学』という題名の

書物があった。戦時中に大八州出版株式会社から出版された黄ばんだ紙表紙にザラ紙印刷の本だった。その序文に莊司先生自らのように書かれている。「思えば私（莊司雅子）がフレーベル研究を畢生の仕事として胸深く決意するに至った動機ともいうべきものは決して少なくない。間もなく高等女学校の一教師として自己の貧しい姿を教壇にさらさなければならぬという女高師三年時代、私が何から久遠な世界を想望してそれに憧れる惱

みは決して浅いものではなかった。しかも仰いで久遠なものを高く彼方に求めるよりはまず自らを見つめよ！この声なき声がついに私をして大学入学を志願させたのである。」久遠なものを高く仰ぎ見ておられるような先生の眼に私は何度も出会ったように思う。その最初は、昭和二十四年、第二回日本保育学会大会がお茶の水女子大学附属



◀ 莊司雅子先生の墓石は立方体、円筒、球を組み合わせている

幼稚園遊戯室で開かれたときである。壇上に仰ぎ見た先生の美しい姿は、あれから五十数年にわたって、毎年日本保育学会大会の度に変わることはなかった。

莊司先生は、若き日について何度も語っておられる。「では何が私（莊司雅子）をフレーベルに惹き付けさせたのでしょうか。フレーベルのどこに私がほれ込んだのでしょうか。まず第一にあげられることは、フレーベルの世界観と人間観には夢とドイツ・ロマンテイクが一貫して流れていることであります。——浪漫的人間は、自然と精神とを一体に見ようとします。だから現実を現実のまま満足するのではなく、現実のうちに秘められてあるもの、また超現実的なものを求めようとするものです。そしてこのような性格が人間をして新しい文化を創造させるのです」莊司雅子著『フレーベル「人間教育」入門』明治図書 一九

七三と。先生の一生がこの一文にこめられていると言つてもよいと思う。先生は晩年に至るにまで同じことを語られる。

世界各地で出会ったそのときどきの思いを集めたエッセイ集『学問の道草』（玉川大学出版部 一九九三）も若き日のことから始まる。「フレーベル研究」筋に無我夢中で歩むこと十数年、足の裏に豆ができたのに気がついた。見たらコンクリートの道の上を歩いてみた。思わず横の草花が生えている土の上を歩いてみた。すると土の冷たさと草花の柔らかさで私の胸の奥に潜んでいた情熱がいつせいに燃え出した。」

人間は本来浪漫的な性格をもっていてたえず永遠なものを思慕し追求している存在であるというのは先生の持論である。子ども自己活動もそこから発するのであり、それはかならず創造的なものであるという先生の幼児教育論に私は共鳴する。

このようにして若き日にフレーベル研究を志し、それを完成された先生ご自身の生涯は実に創造的なものであった。

平和教育

一九八三年、私が大学を辞して日本保育学会の理事会で先生にお会いしたとき、先生はぶつきらほうに、「あんた、いくつ？」と尋ねられ、「神様の命令だと思っただね」と言われた。ずばりと言いつてられたところから、私の中に莊司雅子先生との新しい出会いがはじまった。一週間後に、突然電話を頂き、OME P日本委員会の仕事を担当してくれないかとのことだった。私は一晩考えた後にお引き受けした。莊司先生からのお誘いが重く響いていた。OME P日本委員会の会合は先生が上京のとき宿泊しておられた六本木の国際文化会館で開くのが常だった。世界各地で開催される

世界理事会の報告など、世界の幼児教育の様子を交えて、皆で語り合ったのも、先生との楽しい思い出である。当時の世界総裁マデリン・グタールが一九八五年にユネスコから“Seeds For Peace”『平和の種子—国際理解と平和教育における就学前教育の役割』を出版した。それを日本語に翻訳するときには先生が進んで序文を執筆して下さった。その冒頭に先生は次のように書かれた。

「世界の平和、人類の幸福は世界中の人びとの絶えざる願いでありながら、地球のあちらこちらで戦争や紛争が絶えないのはなぜであろうか。とくに核兵器の出現によって人類は常にその生存をおびやかされている。いまや世界の人々は如何にすれば戦争をさけ、平和を実現することができるかを考えざるを得なくなってきた。」

それから二十年を経た今日、世界は逆転したのではないかと思わせる時代を迎えている。あのと

ますで先生は、「デモクラシーにしても国際連合にしても、科学技術の教育にしても、また宗教にしても、その出発や動機はいずれも人間尊重や人類愛や同胞愛でありながら、その終局においてはつねにその反対の利己主義におちいつてきたからである」と述べ、「問題はここにあるのではないであろうか。」とはつきりと指摘しておられる（『国際理解の教育とヒューマニズム ヒューマニズムの教育思想』第6章 刀江書院 昭和四十二年）。

広島平和文センターから、『親と子のための平和教育』という小冊子を刊行されたのは一九八一年である。「親のみなさま！ヒロシマは世界中の人々にとって、もはや単なる地名ではなくて平和のシンボルです。」からはじまるこの小冊子は、戦争は人の心からはじまるのだから人間の心の中に平和の砦を築かなければならないと、原爆の悲

惨な体験とともに先生は訴えつづけられた。一九九五年に横浜でO M E P世界大会を開催することになったとき、それを読んだ北欧の参加者の方が、心がいっぱいになって昨夜は眠れなかったと語った。先生はすでに足が弱られて外出が困難で、世界大会当日には名誉会員の授与式にも出席されなかった。私が賞状をお届するのが遅れているうち、先生から「早く届けてくれませんか」と、いつもに似ず弱々しい声で催促の電話を頂いてしまった。それを思う度に私は申し訳ない思いでいっぱいである。

莊司雅子先生は一九九八年二月二十二日に亡くなった。

先生が台湾のご出身ということは以前から聞いていたが、葬儀のときになされた広島流川教会牧師森澤一由牧師の告別の辞が真情をこめてそのことにふれていることを出席した友人から聞いた。

今回私は、先生の平和への深い理解がここに源をもつものであることを知って、一層、莊司雅子先生への敬慕の念を深くした。先生ご自身が、異文化のなかにあつて、愛と和解への内心の戦いをし

ておられたからこそと知った。私はあらためて、莊司雅子先生が二十世紀の幼児教育を背負つて生きられたことを意義深く思う。

莊司雅子先生葬儀式辞

— 平和教育の源流 —

森澤 一由

莊司雅子先生は、一九〇九年、当時日本の統治下にあつた台湾の嘉義で尚家の十人きょうだいの四女としてお生まれになりました。ご尊父は人々

から尊敬されていた儒学の教授でした。幼児期に厳しい躾と教育を受けられました。当時台湾人と呼ばれた人たちが日本で高等教育を受けるのに